



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2649 号 2015.9.26 発行

障害者差別寸劇で考える あす仙台でフォーラム

河北新報 2015年09月26日

◎共生テーマに講演も

障害者団体でつくる「誰もが暮らしやすいまちづくりをすすめる仙台連絡協議会」（条例の会仙台）などは27日、障害が理由の差別について問題提起するフォーラムを仙台市青葉区のエル・パーク仙台で開く。

「あなたは差別をうけたこと、ありませんか？～みんなで考えよう、暮らしやすいまちを！」と題し、第1部は仙台を拠点に活動する「仙台小劇団」が実際にあった障害者差別の事例を寸劇で紹介する。

第2部では山梨学院大法学部の竹端寛教授が講演し、障害の有無によらず共生できる社会実現に向けた政策課題や権利擁護の在り方を語る。

条例の会仙台が挙げる障害者差別の事例は「子どもを幼稚園に入れてもらえなかった」「病院で診察拒否された」「災害時に避難所から『出て行け』と言われた」などと多岐にわたる。

杉山裕信代表（49）は「障害者福祉に関心のない人にも来てもらえるよう寸劇を取り入れた。『こういうことも障害者にとって差別に当たる』と理解してもらい、少しでも差別をなくしていきたい」と話す。

午後1時開会。入場無料。連絡先は条例の会仙台022（248）6054。

医師ら、認知症薬「適量処方」を

法人設立、副作用調査へ 共同通信 2015年9月26日



認知症の母親を持つ女性（手前）から治療経過を聞く池袋病院の平川亘副院長＝18日、埼玉県川越市

認知症の薬の使用規定により不必要な増量を強いられ、患者が怒りっぽくなるなどの副作用が頻発しているとして、高齢者医療に携わる医師らが適量処方を推進する団体を26日までに設立した。全国の医師や患者家族に呼び掛け、副作用の実態調査に乗り出す。

高齢化社会で認知症の増加が見込まれる中、投薬治療をめぐる問題提起がされた形だ。

団体は一般社団法人「抗認知症薬の適量処方を実現する会」。自民党の山東昭子参院議員が名誉会長に名を連ねる。医師の裁量で患者に合った用量で使用できるよう国などに要望する。

抗認知症薬は少量から始め、増量するよう添付文書で規定されている。

チョーク配合25年 美唄・谷藤さんに光

北海道新聞 2015年9月26日

【美唄】チョーク製造大手の日本理化学工業（川崎市）美唄工場で働く谷藤正昭さん（5

3) が、独立行政法人「高齢・障害・求職者雇用支援機構」が長期勤続の障害者に贈る本年度の機構理事長賞を、道内で唯一受賞した。知的障害者の谷藤さんは、製造過程で最も重要な材料の配合を任されて25年。製造現場を支える熱心な仕事ぶりが評価された。

9月の障害者雇用支援月間に合わせ、事業所や個人を表彰している。理事長賞は最高位の厚生労働大臣賞に次ぎ、個人の場合は7年以上継続して勤務し、仕事に取り組む姿勢が他の従業員の模範となることなどが条件。本年度は全国から32人が選ばれ、今月8日に東京で表彰式が行われた。



同工場はホタテの貝殻を再利用したチョークを一日18万本製造。従業員32人中、26人が知的障害者だ。

#### チョークの材料を混ぜ合わせ、機械から取り出す谷藤正昭さん

谷藤さんが担うのは、貝殻の粉末や炭酸カルシウムなどの材料を計量して混ぜ合わせる作業。読み書きや時間の管理が苦手なため、混ぜる時間は10分、5分、3分の3種類の砂時計を使う。はかりの目盛りには色がついたテープを貼り、針が決められた重さを超えないことが一目で分かるよう工夫している。

全ての材料を合わせると重さは120キロ。混ぜた後は、機械の中から数回に分けて手作業で材料を取り出す。一日に15回繰り返す体力勝負の作業だ。職場での一番の楽しみは「仲間と話すこと」と谷藤さん。「きついこともあったけど、続けてこれた」と受賞を喜ぶ。

西川一仁工場長は「障害者が意欲や体力を維持しながら仕事をやり遂げるのは簡単ではない。受賞は他の従業員の励みになる」と話している。(加藤千茜)

### 実録オレオレ詐欺 「よその女妊娠させた」という“息子”に「バカタレ！」と一喝したものの… 産経新聞 2015年9月25日

「オレオレ詐欺」のポイント	
① だまされやすい人や、高齢で理解力に不安がある人がだまされるというのは間違い	誰でもターゲットになる。高齢女性が狙われやすいだけ
② 「息子の声ぐらい聞き分けられる」と思っている人が多い	電話で確実に相手を確認しないままでは、推測の中で息子と思い込むことも多い
③ 事実かどうか確かめないうまま話が進む	不安や恐怖心でドキドキしてしまい、相手の話を本当だと思いこみがち
④ 一旦信じてしまうと、相手が提示してくる振り込みなどの課題を遂行することに集中する	難しい振り込みなどの手順もこなしてしまう

※立正大学心理学部西田公昭教授への取材を基に作成

高齢女性を狙い、息子などをかたって現金などをだまし取る、いわゆる「オレオレ詐欺」。これだけ世に知れ渡っても、詐欺が減らないのが現状だ。高齢者の心理に詳しい専門家は「だまされやすい人が引っかかっていると思いがちだが、決してそうではない」と警告。記者の極めて身近な所で実際に起きたケースを紹介する。(兼松康)

#### よどみのない方言で

「僕じゃがね、ああ、お母さん？」  
山口県東部でひとり暮らしの徳島カツ子さん(79)＝仮名、以下同。自宅の固定電話が鳴ったのは、7月のとある火曜日の深夜だった。もうすぐ日付が変わる時間帯。カツ子さんは声の雰囲気などで三男、健さん(43)からの電話だと思った。しかし、普段はそんな時間に電話をかけてくることもないし、自分のことを健さんは「僕」ではなく「ワシ」と言うので、少しおかしいなと思いつつも電話を続けた。相手も名乗らなかったし、カツ子さんも普段から息子に名前呼びかけることもなかった。

「どしたんかね？」

「いや携帯電話が壊れて、今、修理に出しとるけん、番号が変わっとるんじゃけど」  
当地の方言に、よどみはなかった。

カツ子さん宅の固定電話には相手の電話番号を表示する機能はついていなかったが、“息子”がそういうからにはとメモ帳を取り出した。「今、メモするけん。エエよ、番号を言いんさい」

「うん…」

何だかはっきりしないことを小声で言っているが、まだ職場にいて、会社の人とでも話しているのか。なかなか電話番号を告げようとしなない。

「どしたん？ 早う言いんさい」と繰り返すと、番号を告げる声が聞こえ、カツ子さんはメモを取った。

「今日はちょっと風邪をひいとるけん、のどが痛いんじゃ」

ちょっと声がおかしいと感じたのはそれが原因か、とカツ子さんは思った。

健さんは昔から、へんとう炎になりやすかった。カツ子さんは「へんとう炎じゃないんかね。熱は？…38度もあるんなら早う病院に行きんさい。ほっといたら、腎臓やら悪うなったらいけんけえ」と諭した。「こんな時間に自分の車で行ってもダメじゃけ、ちゃんと救急車呼びんさい。病院行ったら電話しんさいよ」。カツ子さんの強めの言葉に、「明日の朝になったら電話するわ」と言い残して電話は切れた。

**もっと心配なことが…**

翌水曜日の朝。“息子”の病状はどうだったのか。カツ子さんは気をもんでいた。昨日メモした番号にこちらから電話してみようか。いやいや、まだ寝とるんかもしれん。そう思いながら電話をせずにいた。

再び電話が鳴ったのは午前11時を過ぎた頃。

「やっぱりへんとう炎じゃと言われたわ」

心配だったが、「熱は少し下がるとる」というので、やや安心した。

「まあ、じゃが休んどかんにゃいけんよ」と告げるカツ子さんに、「病気は良くなったけえエエんじゃが、心配なことがあるんよ」。

何だか気弱な感じだ。

「何かね心配っちゃあ」

「いや、あのね…。うん、えっと…」

グズグズ言っている電話口に向かって「ちゃんと言わんにゃあ分かるまいね。母さんで解決できるか分からんが、言わんにゃそれも分からんが」と言うと、ようやく相手はその心配事を告げた。

「実は、よその女を妊娠さしたんじゃ」

「バカタレ！ 何をバカ言いよるんか！」

窓の外にも聞こえそうな大声でカツ子さんは怒鳴った。「すぐにちゃんとしんさい！」

「いや、実は相手が結婚しとるんじゃ。妊娠が旦那にも知れて。弁護士に頼んで示談にしてもろうたんじゃが、200万ほど払わんにゃいけんのんじゃ。お母さん、貸してもらえまいか」

「バカタレ、そんな金は一銭もないで！ 自分で借りるかなんかしてちゃんとしんさい！」

「貸してくれるところなんてないんじゃ…」

「そんなこと母さんは知らん。バカタレ！」

言葉の通り、カツ子さんにはすぐに出せるお金はなかった。電話の向こうでは「困った」「困った」と繰り返す声が聞こえた。

そして、「誰にも言わんでくれ」と頼まれた。

「そりゃ言いやせんわ。誰にも言える話じゃなかろうがね」

「弁護士から電話が入ったわ。また電話するけえ、切るわ」。相手はカツ子さんの勢いに押されたのか、電話を切った。

大声で怒ってはみたものの、カツ子さんはもんもんとしていた。「ああは言ったがこっちで何とかしてやらにゃいけまいか」と思い始めた。

健さんの住む東京には、長男の俊さん（52）もいる。いつもは俊さんを頼りにしているカツ子さんだが、今回の件はさすがに俊さんに相談する気にもなれなかった。もちろん健さんの家族に告げるわけにもいかない。もんもんとする時間は長く長く続いたように思われた。

翌木曜日の午後7時頃。カツ子さんの携帯電話に、健さんから電話がかかってきた。ディスプレイに表示された番号は、健さんが以前から使っていたそれだ。

「ああワシじゃがね、頼まれとった書類、送ったが届いたかいね」

「書類は来たが、あんた電話は直ったんかいね」

「はあ？」

「ほいであの件はどうなったん？」

「なんかいねそりゃ？」

「電話が壊れた言うもったが」と事情を話し始めたカツ子さんに、「お母さんあんたそりゃだまされとるんよ、典型的なオレオレ詐欺じゃが」と健さん。「ワシがそがいな下手なことするかいや」と半ばあきれ気味に笑う息子に、カツ子さんはこれまでのモヤモヤが一気に晴れていくのを感じつつ、だまされかけた自分を恥じた。

カツ子さんが「金はない」とハッキリ言ったことが奏功したのか、その後“息子”を語る電話はかかってこなかった。

#### 自分はだまされない

しばらくした後、親類の集まりでは笑い話になったこの一件だが、カツ子さんは「私は絶対にだまされないと思うもった」と述懐した。

こうした詐欺被害者の心理に詳しい立正大学心理学部の西田公昭教授は「いわゆるオレオレ詐欺は、10年前からパターンはそんなに変わっていないのに、相変わらず事件は起きている。それは、『こうした詐欺に引っかかる人は、だまされやすかったり、高齢で理解力に不安があったりする人』などと思い込みがちだからだ」と指摘する。

「だまされることが恥ずかしいという社会の偏見があるため、『私はだまされはしない、だまされる人と一緒にしないでほしい。私は大丈夫』という根拠のない自信で大丈夫と高をくくっている面がある。だが高齢女性がだまされるケースが多いのは、もともとターゲットにされやすいからと理解した方がいい」

カツ子さんのように、「強い母」であっても息子の身を案じるのは自然なこと。そこが狙い目だ。

電話で聞き取る声も錯覚しやすい。「息子の声ぐらい聞き分けられる」と思っているも、「実際にはそんなに簡単ではない」と西田教授。日常の電話では「習慣的に相手を確実な方法で確かめるべきがない」のが実情で、「自分にかかってきた電話、相手は息子らしいという推測の中で、息子かなと思いついでしまう。そこに風邪をひいたとか電話の調子がおかしいとかいわれれば、多少、声が違っててもそういうことなのかなと思いつく」という。

カツ子さんにかかってきた電話は、割と知られた手口だったが、「交通事故を起こした」「会社の金を使い込んだ」など、「ストーリーもいろいろ変わり、100%ありえない話ではないように作り込まれている。ところどころつじつまが合わなくても、もしかしてと考えると絶対はない話ではない。そうなのかもしれないと思うと、どんどん不安になり、確かめるよりも不安や恐怖心でドキドキしてしまい、本当だと思ってしまう」と西田教授は、心理の動きを説明する。

「半信半疑の状態でも、疑うより信じる方が1%でも勝れば、電話を切れなくなってしまい、話が本当かどうかを確かめる方法を思いつかないまま、金を用意することになってしまう」

理解力に不安がある人では難しいほど、金の受け渡しや振り込みなどにも複雑な方法が要求されるようになってきている。「銀行で金を下ろす際、車やリフォームの頭金と説明するように言われることもあるし、宅配便で現金を届けさせるなど、詐欺の相手が提示してくる課題を遂行することに“夢中”になってしまい、疑うよりもそこに集中してしまう面もあ

る」と西田教授。

気付くには周囲に相談するのが一番いいが、一人で抱え込みやすくさせることも手の一つであるため、西田教授は「疑いの気持ちをいかにして強くするかを考えなくてはならない」と話している。

警察庁のまとめによると、平成27年上半期で、オレオレ詐欺を含む振り込め詐欺の被害総額は約187億円となっている。このうちオレオレ詐欺は、23年に年間の被害総額が100億円を突破。その後も増え続け、26年は約175億円となった。今年も7月末までですでに102億円を超えている状況だ。

最近では街頭の防犯カメラに映らないよう、現金の受け渡しにアパートの空き室が使われたり、受け取るのが若者でなく高齢男性で「まさか高齢者が詐欺に加担するなんて」と思わせたりするなど、手口も複雑化しているという。

### 高齢者の地方移住について是か非か

産経新聞 2015年9月25日

政府は地方創生の目玉として、健康時から介護が必要となるまで継続的にケアする「日本版CCRC」と呼ばれるコミュニティー構想（生涯活躍のまち）に力を入れている。構想では高齢者の地方移住が盛り込まれ、自治体からは新たな雇用や高齢者の生きがいにつながると期待される一方、医療費など負担を押し付けられる一との声もある。構想を提唱した三菱総合研究所プラチナ社会研究センターの松田智生主席研究員と、東京都立川市の清水庄平市長に聞いた。（森口忠）



今年1月、首都圏から地方への移住を後押ししようと開かれたイベント。高齢者の地方移住も関心が高まりつつある＝東京都江東区の東京ビッグサイト

生きがい持てる地域に 三菱総研主席研究員・松田智生氏

－高齢者の地方移住が盛り込まれた日本版CCRC構想の特徴は何か

「CCRCは活動的なシニアが健康時から介護時まで安心して暮らせるコミュニティーで米国では約2千カ所、約70万人が暮らし、3兆円規模の市場を生んでいる。政府では地方創生戦略と東京の一極集中を解消する方策として、米国の受け売りではなく日本の社会特性に合わせた日本版の実現へ向けて検討している」

－高齢者が縁のない土地へ暮らすことへの不安は大きい

「私たちが提唱した構想は地方移住ありきではない。また要介護者の地方移住でもない。自宅での継続居住や近隣での移住、同じ県内での住み替えの4パターンの中の選択肢の一つ。高齢者が元気なうちに移住し、若者や子育て世代など多世代が輝く街づくりがねらい。健康寿命を延ばして社会保障の抑制につなげるのは対処政策でなく予防政策だ」

－地方は若者を呼び込みに懸命で、高齢者の移住は逆行ではないか

「元気な高齢者が移住して若年層の流出抑制を進める逆転の発想だ。地方の最大の課題は雇用。雇用がないから若者が外に流出する。工場誘致でなく元気高齢者の誘致が有望だ。空き家や団地、廃校などストックを活用しつつ、介護にさせない健康寿命を延ばすための新産業が生まれる。地域の大学と連携して高齢者を取り込む自治体はすでにある。学ぶ意欲の高い高齢者を集めれば大学経営としても有効だし、働ける世代の流入は人口減の抑制になる。生きがいを持てる地域が誕生することを反対する人はいないはずだ」

－有識者会議の日本創成会議が東京圏の介護ベッド数不足を示して高齢者の地方移住を促したが、地方からは「押し付けだ」と反発が出た

「主語の問題だ。創成会議の提言は『東京圏が大変だから地方移住と』と東京主語であり、これでは地方は面白くない。主語を地方にして『わが街が輝くためにアクティブシニ

アを呼び込み地域活性化』とすべきだった。しかし、地方も首都圏の首長も『姥捨て山』『押し付け』と否定するばかりでは何も解決しない。対策を出すべきだ」

－官民が取り組む上で忘れてはいけない視点は何か

「介護報酬による経営では、今の財政では持続できない。『介護にならない』という利用者目線が必要で、利益を生むような予防医療、健康ビッグデータの解析、食事など付加価値の高い組み合わせ型ビジネスへ転換を急ぐことだ。行政は健康に対するポイント制度や減税などインセンティブ（誘発）を与えるといい。制度設計は規制緩和だけでなく日本版CCRC構想に便乗した粗悪な事業者の進出を抑えるための認証規制も不可欠だ」



三菱総合研究所の松田智生主席研究員＝4日、東京都千代田区（寺河内美奈撮影）

まつだ・ともお 昭和41年、東京都生まれ。48歳。慶大卒。三菱総合研究所プラチナ社会研究センター主席研究員。日本版CCRC構想有識者会議委員。著書に「シニアが輝く日本の未来」など。

東京都立川市の清水庄平市長

現代版の「姥捨て山」だ 東京都立川市長・清水庄平氏

－高齢者の地方移住についてどう考えるか

「地域が高齢者や介護者を見守る視点が欠け、現代版の姥（うば）捨て山だ。高齢者からは、長年住んでいるところから離れたくないという声を聞く。未知の土地へ飛び込むのは若者ならドキドキワクワクだが、高齢者にとってはドキドキしょんぼりですよ。受け入れる地方が医療、介護負担を増やすだけだと思うのも当然だ。せめて、方言や食文化が同じ県内での移住など、つながりのあるものでないとうまくいかない」



－東京圏の介護ベッド数不足や医療・介護費の増加など、高齢者を支えるのが困難な地域も出てくる

「介護ベッド数不足解消と高齢者移住は別問題だ。重要なのは元気な高齢者を増やす施策を進めることだ。立川市では市域を6つに分けて地域包括支援センターを設置し、コーディネーターが高齢者の暮らしを支える取り組みをしている。介護や生活相談を一手に受け付け、受け皿となる事業所紹介などを行うものだ。子育て世代の相談にも応じていて、センターが多世代交流の場と役割も担っている。こうした取り組みも元気な高齢者を増やす環境づくりになると考えている」

－政府調査では地方移住について50代の男性が半数、女性は3割が関心を持っている。日本版CCRCはこうした声に沿った構想ではないか

「机上論だ。50代は仕事を手にしている積極的な世代だが、フロンティアスピリットを生かせる仕事があるのか。60代以上の高齢者が真から望んで移住できるのか。私は70歳だが、この年齢になると体力よりも気持ちが大切。生き生きと暮らせるか、マインドが重要だ。移住する住居や施設だけでなく、人材活用の環境を同時に整えないといけない」

－政府が優先してやるべきことは

「国民の健康長寿を延ばすことに力を入れてほしい。今の仕組み、住んでいる街でできることを考えるべきだ。地域の人材を地元で還元する施策を進めてほしい。財政健全化へ向けて、これまでの補助金をつけるような施策ではなく、定年者の経験や知識をキックバックする仕組みを作る。介護支援ロボットなど科学技術の振興策も高齢化社会を乗り越える起爆剤になる」

－CCRC構想モデル事業に200を超す自治体が推進したいと考えている

「仕組みが定着するには何十年とかかる。全国市長会の行政委員長として地方の意見を数多く聞くが、政府頼みの姿勢という首長もときにはいる。高齢者の地方移住についても、民間業者にやらせればうまくいくと話す人もいる。だが、極めて安易な考えだ。高齢者の移住という提示は自治体や国民にインパクトを与えたが、乱暴だと言わざるを得ない」

しみず・しょうへい 昭和20年、東京都生まれ。70歳。日大卒。信用金庫勤務から東京都立川市議、市収入役を経て、平成19年に立川市長に初当選。現在3期目。全国市長会行政委員長。

発達障害児悩みに回答 子育てQ&A冊子を発行 篠山 神戸新聞 2015年9月25日  
自閉症や発達障害の家族向けにQ&Aの冊子をまとめた奥平綾子社長＝篠山市味間奥



発達障害の子どもと家族をサポートしようと、子育ての悩み事と対応例をまとめた冊子を兵庫県篠山市味間奥の会社「おめめどう」が発行した。実体験を交えて執筆した社長の奥平綾子さん（52）は「同じ悩みを持つ人が周囲にいることに気付いてもらいたい」と話す。（岩崎昂志）

奥平さんの次男（23）は3歳で自閉症と診断された。子育てを通し、奥平さんは自閉症の特徴に合わせて筆談でスケジュールを伝えるメモ帳などを考案。2004年に会社を設立して販売するほか、講演や悩み相談にも取り組む。

今回発行したのは「ハルさんのスカッとQ&A」「ハルさんのズバッとQ&A」の2冊。当事者の質問に答える形式で、09年にメールマガジンで連載した内容などを抜粋し、

加筆・修正した。

親からの質問はさまざま。「声の音量が大きい」など子どもの言動に悩んだり、「学校の先生への伝え方が難しい」など周囲との関係に気をもんだり…。

「（子どもが）嫌なことがあるとすぐトイレに行く」との相談には「静かで1人になれるから、行くお子さんは多い。トイレであっても、しんどさから逃げることができているのは素晴らしいと思う。行くこと自体を妨げるのは、他の場所での排せつにつながるのによくない」と回答。子どもが混乱しないようスケジュールを視覚的に伝える必要性などを話し言葉風の軟らかい文章で伝える。

奥平さんは「正解がなくても、100項目の中で自分と似た悩みも見つかるはず」と話す。

各648円。同社ホームページで販売している。おめめどうTel079・594・4667

知的障害者への理解を 250人が県内をパレード 東京新聞 2015年9月25日



メッセージを読み上げる織田さん＝安中市で

「第四十三回福祉パレード」が約二百五十人が参加した県庁での出発式の後、県内四方面に分かれて実施された。「共に生きる未来をめざして」をスローガンに、知的障害がある人への理解と福祉の充実などを訴え巡回パレードし、県内三十五市町村にメッセージを届けた。

同パレードは、九月の「知的障害者福祉月間」にちなんで、「自立の困難、経済的不安、心身の疲労、親亡き後への不安」など、障害者やその家族が抱える課題への支援を求めて毎年実施されている。

安中市役所では、訪れた一行約四十人を市内の知的障害者や関係者ら約百人が出迎えた。同市心身障害児者父母の会の織田伊代子会長（68）と、福祉施設エルピスあけぼのに通う茂木浩司さん（38）が、共に生きる社会の実現を求めるメッセージや日ごろの生活状況を説明し知的障害者への理解を求めた。（樋口聡）

## 貧困、30年までに撲滅を＝新開発目標採択－国連サミット

時事通信 2015年9月26日

【ニューヨーク時事】国連本部で25日、加盟193カ国の首脳らを招いたサミットが3日間の日程で開幕し、2016～30年の国際社会の共通開発目標「持続可能な開発のための2030アジェンダ」が採択された。アジェンダには、貧困撲滅や資源保護など17分野で169の目標が明記された。来年以降、各国が取り組む開発政策の指針となる。

アジェンダは今年末までの15年間で対象の「ミレニアム開発目標」の後継で、8月に加盟国が合意した。1日1.25ドル（約150円）未満で暮らす「極度の貧困」や飢餓を終わらせ、すべての子供に初等・中等教育を提供するなどの目標が設定された。

ミレニアム目標は主に途上国の開発を目指したが、アジェンダでは日本など先進国も国内の貧富の格差是正、子供への暴力撲滅、気候変動への対応など多くの課題で取り組みが求められる。

潘基文事務総長は採択に先立ち、「アジェンダの試金石は『履行』だ。あらゆる場所のすべての人の行動が必要だ」と訴えた。

ミレニアム目標では、極度の貧困人口が1990年の19億人から半分以下に減るなど、複数の項目が達成された。ただ、8億3600万人が今も極貧にあるほか、子供や妊産婦の死亡率低減なども目標に及ばなかった。

国連サミット開催は10年ぶり。今回は国連創設70年を記念する意味合いがある。期間中、日本など過去最多の150カ国以上から首脳が出席し、演説する。

## サミット前にベッカム氏、子供の福祉向上訴え

共同通信 2015年9月25日



24日、ニューヨークの国連本部で記念写真に納まるデービッド・ベッカム氏（中央）（共同）

国連サミットが25日に開幕するのを前に、サッカー元イングランド代表で国連児童基金（ユニセフ）親善大使を務めるデービッド・ベッカム氏が24日、国連本部で開かれたイベントに参加し、子供たちの福祉向上への取り組みを呼び掛けた。

ベッカム氏は「私は子供たちが暴力や貧困のない環境で育ち、防ぐことのできる病気を患ってしまうことがないような世界を望む」と訴えた。

イベントには潘基文事務総長、ユニセフのレーク事務局長も参加。IT大手グーグルが提供した数十個の箱形スクリーンに「紛争を終わらせて」「教育を改善して」といった子供たちのメッセージが映し出された。

国連サミットでは、極度の貧困や飢餓を撲滅することなどを掲げた「持続可能な開発目標（SDGs）」が採択される。

## 福祉医療機構理事長に中村氏

日本経済新聞 2015年9月25日

厚生労働省は25日、福祉医療機構の長野洋理事長（71）の後任に中村裕一菱進ホールディングス社長（60）を任命する人事を決めた。来月1日に発令する。

中村 裕一氏（なかむら・ひろかず）77年（昭52年）東大教養卒、三菱信託銀行（現・三菱UFJ信託銀行）入行。14年菱進ホールディングス社長。東京都出身。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

